

## 佚存平安朝詩注

後藤，昭雄  
大阪大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/11927>

---

出版情報：語文研究. 66/67, pp. 1-9, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 佚存平安朝詩注

後 藤 昭 雄

近時、平安朝漢詩文に関する埋もれた資料の発掘、紹介、あるいは未刊資料の公刊がかなり行われつつある。ここ数年間に限っても「保元二年賀内裏新成詩卷」「中右記部類紙背漢詩卷二十八」「東大寺感願文集所収詩」「教家摘句」「勸学會記」「平安朝佚名詩序集抜萃」「尚齒全詩」「異本本朝統文粹卷七」などをあげることができる。

新資料の紹介ということは、基礎資料の整備という観点から、私も現在関心を寄せていることの一つで、上記のうちのいくつかは考察の対象として取り上げた。また、同様の観点から、『日本詩紀』の遺漏を拾うというかたちで輯佚の作業が続いている。その過程で出会った資料には、上記の諸書のようなまとまった分量を持つものではなく、断片ではあるが、内容的には文学史の記述に参与しうるなど、注目すべきものも含まれている。そのようなもののうちから、ここでは与えられた紙幅のなかで、三点を取り上げてみよう。

## 一 小野篁の詩

『擲金抄』は平安末期から鎌倉期にかけて数多く作られた作文作

法書の一つであるが、平安朝詩の逸句が多く引載されている点で貴重である。中下巻が伝存し、宝生院真福寺文庫に弘安元年（一二七八）の古写本が伝わる。この『擲金抄』に小野篁の詩が三首引かれて残る。

### (1) 右相公花亭法華会

恋恩淚向花前尽 追徳心於世後伸

玉聲音思弦管奏 衲衣僧代綺羅人

(卷中仏法部)

### (2) 別席賦竹

君能看取幽貞色 莫忘故園一野篁

(卷下絶句部植物)

### (3) 菊花落、寄推

君猶恋菊当看我 黄在衣彩白在頭

(卷下絶句部植物)

まずは、現存する詩篇がさほど多くない小野篁の佚詩として貴重であるが、内容的にも興味深いものがある。

(1)は、『文徳実録』仁寿元年（八五二）三月十日条と併せ読むべき

ものである。この日の記事は、右大臣藤原良房の染殿第に行幸して名木の桜樹を賞覽することを約束しながら、それを果たしえないまま没した仁明天皇を追慕して、咲き誇る桜花のもので法華会が行われたことを記して、はなはだ印象深いものであるが、最後に「公卿大夫、詩を賦して懐ひを述べ、或は和歌もて逝くを歎く」という。その時の詩がすなわちこの「右相公花亭法華会」なのであるが、詳しくは別稿に述べた。

(2)も、摘句ながら、詠竹を主題とすること、後句の詠法に特徴が表われていることなど、注目すべきものがあるが、これも前に言及したことがある。

ここでは(3)を取り上げてみよう。これも摘句ではあるが、述べべきいくつかのことがある。

菊花落、寄推(惟十二)

君猶恋菊当看我 君なほ菊を恋ひせば当に我を見るべし

黄在衣彩(彩)白在頭 黄なるは衣の彩に在り白きは頭に在り

この詩は『別本和漢兼作集』巻七(242)にも入集するが、『擲金抄』所収詩と異同がある。( )の中に示したのがそれであるが、詩句の二例はともに草体が近似する。魯魚の誤りであろう。「恋」と「慈」、「衣彩」と「衣衫」、意味の上からはいずれも可能な本文である。そこで平仄を顧慮してみると、「恋」と「衣衫」が適切な本文と考えられる。

まず詩題から考えてみたい。詩題のうち「推」と「惟」はやはり草体の近似から誤ったものであるが、「兼作集」詩には「惟十二」とある。「寄推」では解釈がつかないが、「寄惟十二」なら分かる。「惟十二に寄す」で、「惟十二」は人名であり、「十二」は排行である。

篁の周囲にあって「惟十二」と呼ばれる人物として直ちに想起されるのは惟良春道である。『扶桑集』巻七贈答部に唱和往復の詩五首があつて両者の親交をものがたる。そうしてそのうちの篁の一首の詩題には「近ごろ拙詩を以て王十二に寄す。適たま惟十四の之に和せる什を見る。因りて以て解答す。」とある。同じように春道が排行で呼ばれている。ただし「十二」と「十四」と齟齬がある。しかしまた篁の周辺に「惟十二」に該当する人物を他には見いださない。

この食い違ひはいずれかの誤りとみてよいであろう。この詩は惟良春道に贈られたものであり、篁と春道との親昵をもの語る更なる一例である。

次いで、この詩は、いつ、あるいはどのような状況の下で作られたものか、ということの問題にしよう。

後句に「黄は衣衫に在り」というが、思い合わせるべきものとして『統日本後紀』承和七年(八四〇)六月十七日条の次の記事がある。

流人小野篁入京。披黄衣以拜謝。

周知の承和五年の遣唐の役における隱岐への配流に関する一連の記事の一つである。

五年十二月、篁は除名され庶人に降されて配流されたが、七年二月には召還された。次いで右の記事がある。しかしなお無位のままで、本爵の正五位下に復するのは八年閏九月に至つてである。「黄は衣衫に在り」とは、無位として「黄衣を披て」いることをいう。

ここで『今鏡』巻八「皇子たち」の「腹々のみこ」の次の記述が併せ考えられなければならない。無品親王の袴の色について語るなか

無位の人は黄袍なるべければ、小野篁が隱岐より帰りて作りたる詩にも、請ふ君菊を愛せば我を見るべし。白きことは頭にあり黄なることは衣にありなどぞきこえ侍りし。

とある。上述のことと同じことを語るが、引用の詩句に違いがある。

『日本詩紀』は、これに基づいて、

請君愛菊須看我 白在鬢頭黃在衣

と復原する。『擲金抄』所引詩と違いがあるが、異伝ということになる。

この詩は、隱岐より召還されて後、本爵に復する以前、無位として黄衣を着ることを余儀なくされていた間の作ということになる。

この詩はさらにもう一つの問題を提起する。

それは後句「黄在衣衫」白在頭」の構成である。一句が4・3と切れ、それが類似表現の繰り返しでありつつ、意味のうえでは対偶をなす。同様の形の句は惟良春道の詩にも見られる。「与野十一唱和往復之後、餘思未洩、更勸三章以代懷」のその二（『扶桑集』卷七）の第二句に、

鶯有喬木 鷄有冠 鶯は喬木に有り 鷄は冠有り

とあるのがそれである。そうして小島憲之氏はその典拠として元稹の「鳳有文章 雉有冠」（『寄樂天二首』）『元氏長慶集』卷二十一）を指摘された。類句としてさらに「鳳有高梧 鶴有松」（卷十九）『鄂州寓館敵潤宅』をあげることができるが、じつはこの句形は白居易の詩に窺見するのである。

『千載佳句』（卷上・朋友）に、

鷄在中庭 鶴在雲 鷄は中庭に在り 鶴は雲に在り

『和漢朗詠集』（卷上・露）に、

露似真珠 月似弓 露は真珠に似たり 月は弓に似たり  
が見いだされるが、最近刊行された岡村繁著『白氏文集三』（新釈漢文大系）のページを繰っていくなかで次のような多くの例に出会った。

### 卷十三

632 香勝 燒蘭 紅勝霞 香は燒蘭に勝り 紅は霞に勝る

697 爐火欲銷 燈欲盡 爐火銷えむと欲し 燈尽きむと欲す

### 卷十四

720 半落春風 半在枝 半ばは春風に落ち 半ばは枝に在り

767 居人思客 客思家 居人は客を思ひ 客は家を思ふ

787 半是君詩 半是書 半ばは是れ君が詩 半ばは是れ書

790 滿地槐花 滿樹蟬 地に滿つる槐花 樹に滿つる蟬

799 摘得菊花 攜得酒 菊花を摘み得 酒を携へ得たり

805 滿面胡沙 滿鬢風 面に滿つる胡沙 鬢に滿つる風

眉銷 殘黛 臉銷 紅 眉は殘黛を銷し 臉は紅を銷せり

### 卷十五

824 嫩似花房 脆似瓊 嫩きこと花房に似たり 脆きこと瓊に似たり

827 半払平沙 半入雲 半ばは平沙を払い 半ばは雲に入る

841 主人來少 客來多 主人は來ること少く 客は來ること多し

860 滿窗明月 滿簾露 窓に滿つる明月 簾に滿つる露

868 色似桃花 語似人 色は桃花に似たり 語は人に似たり

882 醉來堪賞 醒堪愁 酔ひ來りては賞するに堪へ 醒めては愁

ふるに堪へたり

889 厨無煙火 室無妻 厨には煙火無く 室には妻無し

899 半故青衫半白頭 半ば故き青衫 半ば白き頭

卷十六

918 枝上稀疎地上多 枝上は稀疎にして 地上は多し

963 魚恋江湖鳥厭籠 魚は江湖を恋ひ 鳥は籠を厭ふ

805の詩ではこの句形を連ねて対句を作っている。

『白氏文集』の詩注二冊を卒読するなかで直ちにこれだけの用例を拾い上げることができるといふことは、この形の句作りをいかに白居易が愛好し頻用したかをも語るものである。899「半ば故き青衫半ば白き頭」のごときは、「衫」と「頭」が対をなし、これに色対を重ねるという点で、篁の詩の表現にはなほ近いものがある。篁の詩の特徴ある句作りは白居易に学んだものといつてよいであろう。

篁が春道とともに白居易文学のいち早く受容者であることは、これまで既知の作品の分析を通して明らかにされているが、この一旬もささやかながら、その確かな事例として加えることができる。

## 二 寛仁二年藤原頼通大饗屏風詩

寛仁二年（一〇一八）正月二十三日、摂政内大臣藤原頼通は大饗を行い、その料に大和絵屏風を制作させたが、その色紙形には漢詩と和歌とが書かれた。この時のことを記録した『小右記』『御堂関白記』『左経記』の記事からその要点を摘むと、献ぜられた詩と歌について、藤原斉信と藤原公任とが撰定に当たり、詩は、斉信、公任の二人は各々五首、藤原広業、慶滋為政、藤原義忠、藤原為時についてはそれぞれ二、三首を採った。和歌は大口巨輔親、藤原輔尹、

和泉式部、藤原道長、公任の作が撰入された。そうしてこれらの色紙形は藤原行成によって清書された。

この頼通大饗屏風詩歌を書いた断簡が伝存する。「屏風詩歌切」ないし「詩歌切」と称される古筆切で、行成あるいは藤原行経筆と伝称される。

一つは賀茂臨時祭を詠んだ為時の詩と輔尹の歌を書く。その二は仏名を詠んだ輔尹の歌と除夜を詠じた義忠の詩を書く。もう一葉は詩はなく、除夜を詠んだ輔親と輔尹の歌が残る。

以上の三葉がこれまで頼通大饗屏風詩歌を書いた古筆切として伝存するものとされていた。平凡社版『書道全集12 平安II』（昭40）にまとめて収められ、解説（田中塊堂）に、現存三紙のみとの記述がある。和歌史研究の立場から初めてこの詩歌切に注目された杉谷寿郎氏もこれを承け、また平安朝漢文学史研究の立場から専らその屏風詩を対象として考察した私もこれらに従って考えたのであった。

ところがじつはもう一葉伝存していたのである。最初それに気付いたのは東京国立博物館資料館に所蔵される焼付写真を見ていくなかであったが、調べを進めるうちに河出書房版『定本書道全集 平安時代I』（昭29）に同一のものが図版として掲出されていることを知った。

東京国立博物館資料館蔵の写真には次の記録がある。

M3972 品名 待歌切。所在 江守。形質 紙本墨書。縦9寸1分、横2寸7分。平安時代 伝道風筆。

撮影ないし調査の日時の記録がないが、写真の状態から推測すると、かなり以前に作成されたものであらうと考えられる。

『定本書道全集』では「伝藤原行成 詩歌切」と称されている。解説（堀江知彦）に、料紙は「緋維染めの藍紙」とあるが、その料紙、書体、また次に示す内容から、この「詩歌切」が前述の三葉のツレであることは間違いない。

「詩歌切」には次のようにある。

為時

□笛声清人意染其神欽亨暗知齋場有一俳優士醉舞跳梁不道□

輔尹

□みのますみやまさかきにゆふかけてよはにそいのるきみかみよをは

輔親 式部並不献

このうち輔尹の歌は『万代和歌集』卷七神祇（一六二）に入集し、その詞書には、「法成寺入道前撰政治家屏風に」とある。法成寺入道前撰政は藤原道長である。頼通大饗屏風歌が後代の歌集に採録される場合、その多くが道長と誤られているが、これもそうである。なお、『万代集』所載歌から、歌の冒頭の欠字は「か」であることが明らかになる。

この為時の詩と輔尹の歌は何を詠んだものか。輔尹の歌を引く『万代集』は前記のように屏風歌であることをいうのみである。為時の詩を読んでみよう。

□笛声清人意染

□笛声清かにして人意を染しましむ

其神欽亨暗知

其れ神を欽しみ亨る暗かに心に知らるべし

齋場有一俳優士 齋場に俳優の士有り  
醉舞跳梁不道□ 醉舞跳梁して

「其神欽亨」また「齋場」の語句から、この詩は神祠における祭儀の場での詠作であると考えられる。輔尹の歌も神祇歌であり、これに一致する。

頼通大饗屏風は、すでに明らかにされているが、年中行事を中心とした月次屏風であった。その題もかなりのものが明らかになっているが、その中からこの二首の詩歌の題として可能性のあるものをあげてみると、春日祭、石清水臨時祭、賀茂祭、賀茂臨時祭が一応考えられる。しかし、賀茂臨時祭については前述のごとく、これを題とする為時の詩と輔尹の歌を書いた切れが別に存する。まず除外しなければならぬ。また賀茂祭も、『万代集』卷三夏（五二七）に、  
輔尹の

法成寺入道前撰政治家屏風に、賀茂祭を

神やつことるやなにそちはやふるかものまつりにあふひなり  
けり

の歌が別にあることから除かれる。さらに春日祭は、この屏風では祭使の出立が題とされている。『采花物語』卷十三「ゆふしで」に、この頼通大饗屏風歌のことが描かれ、八首を引用するなかに、「春日の使立つ所」を題とする歌がある。ところがその作者は和泉式部である。今ここに論じている詩歌切には、式部は輔親とともに「不献」とある。従って、これは春日祭でもありえない。残るのは石清水臨時祭である。

なお、頼通大饗屏風詩歌の題をはなれて、広く有職故実書の類に記載されている年中行事から、考えられそうなものを拾ってみる

と、他に大原野、平野、松尾、梅宮等の祭りがあるが、平安時代の屏風詩歌のなかに、これらを題とした作は見いださえない。

詩、歌ともいづれかに比定しうる手がかりの語句を含まないところから、消去法をとらざるをえないが、このように見てくると、この断簡に書かれた為時の詩と輔尹の歌は、石清水臨時祭を詠んだものと考えられる。

なお、為時の詩についていえば、これまで知られなかった為時の詩一首を得たということでもある。

### 三 伝藤原忠通筆筆手下絵往来書卷

これは往来物の一巻である。この書卷を紹介した小松茂美氏の解説<sup>(12)</sup>によれば、本来、縦29・5cm、横51・5cmの紙を継いだものであるが、伝来の過程で切断され、今は大小区々の十六紙を切り継いだ残巻である。小松氏の紹介によって存在を知り、関心を寄せていたが、六十一年十二月、東京国立博物館に出陳されたので、その折、全巻を見ることができた。<sup>(13)</sup>内容のうえからは五部に分かれるが、ここで取り上げるのは、その第二の「庚申御会事」である。その本文を、いま句読点、返り点を付してあげてみよう。

#### 庚申御会事

右参会之輩、皆是時之儒宗、道之雄伯也。連句及二百韻、尤以可然。此事起自漢朝。武帝元封三年柏梁台新成之日、詔群臣、有能為七言者、乃得上座。是其濫觴也。我朝古昔之人、掩韻為宗、不好連句。若被催逸興之時分、必及數十韻。歟。所謂

- (1) 深草人為<sub>レ</sub>器 小松僧沸<sub>レ</sub>湯
- (2) 千六百年鶴 二三兩月鶺
- (3) 人曰<sub>二</sub>山城介<sub>一</sub> 世稱<sub>二</sub>水駅官<sub>一</sub>
- (4) 漢永安宮竹 唐慈恩寺藤
- (5) 勝地大炊殿 名家小野宮
- (6) 巴座讀岐布 疎麻伊予懸

此等之句古來之口談也。

嘉保之比、都督源重相、於<sub>二</sub>都護納言別庄<sub>一</sub>相伴高才宿学之徒、令<sub>レ</sub>鬪難字。世謂<sub>二</sub>之西院大連句<sub>一</sub>。猶又不<sub>レ</sub>滿。

ここで切り継ぎされていて、以下は内容の上から連続しない。

連句に関する一資料である。

まず庚申会の折に行われた連句であることが記されているが、庚申会のような夜を徹して時を過す場では、連句は恰好の文事であったと思われる、『明衡往来』所収の書簡にも庚申会での連句のことが述べられている。

次に連句が二百韻に及ぶ長連句であったことが記されている。平安時代における連句の史的展開については先学の論稿があり、句数の変化についても言及がある。それによると、院政期に転換期があり、以後、長連句が多く作られるようになったようである。古記録から句数の記された例を拾って整理されているが、それによれば、天仁三年(一一一〇)三月十二日の「百餘韻」、天永二年(一一二一)三月六日の「百五十韻」(ともに『永昌記』)、養和元年(一一二一)十月十五日の「百二十韻」(『玉葉』)などが句数の多い場合であるが、ここに記されている二百韻という連句はそのいづれよりも大規模なものである。

ついで、漢の柏梁台での七言詩にもとづくという連句の起源が述べられている。これはすでに早く後代の擬作であることが明らかにされているが、たとえば『文心雕龍』明詩にも、「連句の韻を共にするは則ち柏梁の餘製なり」とあり、古くは一般にそう考えられていたのである。

ついで、「我朝古昔之人、掩韻為宗、不好連句」の記述は、『河海抄』に、『源氏物語』賢木巻に見える「あむふたぎ」に施した注にもほぼ同文が引用され、これには「孝範朝臣記に見ゆ」の注記がある。

次に連句六首が「古采の口談」としてあげられているが、このうち(1)(2)(3)の三首は『江談抄』にも引かれている。すなわち巻六の最後に、五言の連句の実例が引掲されるのにこの三首が含まれている。そうしてそれには(1)の前句は大江山、(2)は大江山時棟と藤原明衡、(3)は惟宗孝言と大江佐国という作者表記がある。

これに対して、(4)(5)(6)の三首は、この書巻によって初めて知られる連句である。注を付けておこう。

(4) 漢水安宮竹 唐慈恩寺藤

永安宮は四川省奉節県の東北、臥龍山の下に営まれた宮殿で、かの劉備が没した所として知られるが、竹との関りは未勅である。

対して、慈恩寺の藤は本朝の詩文にも屢見のものである。まず『和漢朗詠集』巻上・藤に、白居易の、

悵望慈恩三月尽 紫藤花落鳥関々

がある。この句は遡って『千載佳句』(巻上・送春)にも採録されるが、平安朝の詩人たちはこれを句題として詩を詠じている。『本朝文粹』巻十一に、「三月尽日遊五覚院同賦紫藤花落鳥関々」と題す

る源順の詩序があり、

是を以つて吏部不益を停め、唐の太子賓客白樂天の、慈恩寺に於いて作る所の紫藤花落鳥関々の句を詠じ、即ち座客に命じて、各其の心を賦せしむ。

と記されている。また、『千載佳句』(巻上・送春)及び『和漢朗詠集』(巻上・三月尽)所収の、白居易の

悵悵春暈留不得 紫藤花下漸黃昏

は、『白氏文集』巻十三、「三月三十日題慈恩寺」中の一聯であるが、先の詩と同じく広く受容されたものと思われ、たとえば藤原明衡は、「閏三月尽日慈恩寺即事」(『本朝無題詩』巻九)に、

丹心初会伝青竹 白氏古詞詠紫藤

と詠じ、後句に、「白氏文集慈恩寺三月三十日詩云、紫藤花下漸黃昏」と自注を付している。さらに、惟宗孝言も同時の作に、

白氏昔詞尋寺識 紫藤晚艶与池巡

と詠ずる。

これら白居易の詩を通して、「慈恩寺の藤」は周知のものとなったのである。

(5) 勝地大炊殿 名家小野宮

大炊御門大路には「大炊殿」あるいは「大炊御門殿」と称された邸第がいくつかある。<sup>(18)</sup>堀河天皇の里内裏となつた大炊御門南、西洞院東の藤原師実第、大炊御門南、万里小路西の白河院御所、大炊御門北、東洞院西の鳥羽天皇の里内裏、いずれも「大炊殿」と称されてお

り、ここにいう「大炊殿」がそのいずれであるのか、特定しがたい。

小野宮は、周知の藤原実頼より出る、いわゆる小野宮家の呼称の

抛つて来たる邸第である。『拾芥抄』によれば、「大炊御門南、烏丸西。惟喬親王家。定頼公伝領之、清慎公伝領之」とある。

(6) 円座讃岐布 疎簾伊予懸

諸国の物産を対するが、まず讃岐の円座については、『延喜式』巻二十三民部省にあげられた「交替雑物」に、讃岐については「菅円座四十枚」と見え、『新猿蓑記』に、四郎君の条に、彼が郎等として仕える受領の許に集積された諸国の土産が列挙されるが、そこに「讃岐円座」がある。また『長秋記』天承元年三月二十二日条にも見える。

伊予の簾は、前述の『新猿蓑記』にあげられているほか、遡って仮名文学にも散見し、『宇津保物語』藤原君、『枕草子』「にくきもの」及び「六位の藏人などは」の段、『源氏物語』柏木、さらに『今昔物語集』巻二十四第六話などに描かれている。

以上の連句の列挙に続いて、「西院の大連句」の記事がある。

嘉保の比、都督源重相、都護納言の別庄に於いて、高才宿学の徒を相ひ伴ひて、難字を闘はしむ。世にこれを西院の大連句といふ。猶又百□に満たず。

嘉保は堀河の治世。わずかに三年間（一〇九四〜九六）であり、人名の比定も容易となる。まず「都督源重相」、大納言大宰帥の源氏は経信である。嘉保元年六月十二日に民部卿より権帥に転じている。また「都護納言」は権大納言按察使の藤原宗俊で、嘉保三年正月二十四日この官に就いている。従つて西院大連句の開催はこの年ということになる。世に「西院の大連句」と称されたということから、大がかりな連句であったと考えられるが、他には所見がない。この書巻によって以上のことが知られるのみである。

以上の三点、いずれも断片的資料ではあるが、上述のような意味を持って文学史の記述を補いうるものである。

〔注〕

- (1) 佐藤恒雄「保元二年冬賀内裏新成詩巻(断簡)について」(『国語と国文学』60巻7号)、拙稿「中右記部類紙背漢詩解題」(天理図書館善本叢書『平安詩文残篇』)、拙稿「東大寺藏『願文集』所収詩断簡について」(『国語と国文学』62巻1号)、柳澤良一「教家摘句の散佚詩句、及び長句・詩句の作者」(『国書逸文研究』16号)、藤原中通筆勸学會記(講談社刊複製)、山崎誠「平安朝佚名詩序集抜萃について」(『平安文学研究』76輯)、「尚歯會詩」(徳川黎明會叢書『私家集・歌合』)、大曾根章介「本朝統文粹」の異本(『中央大学文学部紀要』文学科59号)。
- (2) 『日本詩紀』拾遺(一)〜(五)、『大阪大学教養部研究集録』33〜37輯。
- (3) 「王朝の漢詩」(『日本文学講座』第9巻、大修館書店)。
- (4) 「漢文の受容」(日本の古代14「ことばと文字」、中央公論社)。
- (5) 『新編国歌大観』(第六巻)番頁。
- (6) 『国風暗黒時代の文学中』(上)601ページ。
- (7) 当該の一句のみをあげる。また、周知のように白居易詩には長文の詩題が多い。煩を避けていまは作品番号のみを示す。
- (8) 金子彦一郎「元白詩筆と童・春道の詩」(『国語と国文学』29巻2号)、注6の小島氏著など。
- (9) 「屏風詩歌切をめぐる」(『和歌史研究会会報』70号)。
- (10) 「寛仁二年藤原頼通大饗屏風詩について」(『語文』45輯)。
- (11) 注10の拙稿に整理して示した。
- (12) 小松茂美著『墨香秘抄』。なお、これには、「暮手下繪十二月往来残巻」と称されているが、いまは後述の東京国立博物館における出陳時の名称に従った。

- (13) 東京国立博物館資料館に本巻の写真一葉が保存されており、「葦手下絵消息往来」と称されている。撮影年時の記録はないが、かなり古く、これには所蔵者として「東京、植村常次郎」の記載がある。また『書苑』四巻二号(明44)に紹介されている「法性寺関白忠通公消息往来」は本巻である。そこでの所蔵者は「東京、斎藤一馬君」。「解説」(大口周魚)に「本巻は消息文六篇を、手本として、葦手の下絵あるめでたき料紙に書かれた長巻にて」とあるが、図版として掲げられている部分(九行)は現存の書巻には見えない。文中に「窮秋之景色」とあり、九月の消息の一部と思われる。さらに「解説」に重野安繹の書状が引用されているが、そこに言及されている「孟冬五日ノ書」も見出しえない。現存の書巻には数箇所切断の痕跡があり、切り出されたのであろう。
- (14) 柳澤良「平安時代の聯句の史的展開」(『中古文学』16号)。
- (15) 『江談抄研究会』類聚本系江談抄注解参照。
- (16) 『白氏文集』卷十一の「酬三元員外三月三十日慈恩寺相憶見寄」の一聯であるが、原詩では「紫藤」ではなく「紫桐」。我が国ではこれを「紫藤」として受け容れている。
- (17) この慈恩寺は、承和年間、唐土の慈恩寺を模して、滋野貞主によって、その西寺の南の居宅を喜捨して建立されたものである。『統日本後紀』承和十一年四月三十日条参照。
- (18) 日本歴史地名大系『京都市の地名』を参看した。
- (19) 日本思想大系『古代政治社会思想』における補注(大曾根章介氏執筆)に指摘される。